

社会理論とメディア研究[®]

——ニクラス・ルーマンのマスメディア理論の再解釈

梅 田 拓 也 (東京大学大学院)

1. はじめに

1-1 問題の所在

本稿の目的は、ニクラス・ルーマンのテキストの再解釈を通じて、メディア研究における彼のマスメディア理論の意義を再考することである。ルーマンのマスメディア理論は、マスメディアを社会システムとして記述する理論として注目を浴びてきた。ドイツではメディア論やジャーナリズム論やコミュニケーション論といった領域でルーマンの議論をもとにしたメディア理論の構築が試みられている (Görke 2003; Meyen et al. 2014)。日本でもジャーナリズム論や情報社会論といった文脈において受容されてきた (林 2002; 西垣 2004; 大黒 2006)。国内外問わずそのような期待が集まる一方で、ルーマンのマスメディア理論は抽象度の高さゆえに経験的なメディア研究やジャーナリズム研究との接続に困難があるとされてきた (林 2003: 58)。しかしこれらの議論では、ルーマン自身がどのようなメディア研究との接続を図ったのかということを捨象した解釈が進められてきた。それゆえルーマンのマスメディア理論と他のメディア論の学説史的連関を踏まえてルーマン理論の意義を再解釈する必要がある。

さらにこの問いは、ルーマン学説史研究のみならず近年の日本のメディア理論研究において共有されている問いにも関連する。2017年1月発行の『マス・コミ

ユニケーション研究』第90号では、現代のメディア研究における社会理論の意義が問われていた。ここでは例えば、メディア研究におけるヘゲモニー概念を軸とした政治理論の持つ意義（山腰 2017）や、デジタルメディアの分析における批判理論の持つ意義（毛利 2017）が提起されていた。翻ってルーマンは「ハーバーマス＝ルーマン論争」にも見られるようにキャリアの初期から、政治理論や批判理論とは異なる方向性の社会理論として自身の社会システム理論を位置付けようとしていた。本稿では、メディア研究におけるルーマン理論の意義を再解釈することで、社会理論的メディア研究の他の方向性を模索したい。

1-2 先行研究の検討と本稿の分析視座

本論に入る前に、ルーマンマスメディア理論との接続を図ったメディア理論研究の先行研究を概観し、その問題を指摘した上で、本稿の分析視座を述べる。

ルーマンのマスメディア理論は、社会理論においてメディアを論じる研究の中で一定の評価を受けてきた。①例えばメディア理論研究の領域では、ルーマンのマスメディア理論を応用してマスメディアの活動と政治過程の関係を記述する理論的研究が進展している（Marcinkowski 2014；Meyen et al. 2014⁽¹⁾）。これらの議論ではルーマンのシステム理論を踏まえて、さまざまな政治的現象を政治システムやマスメディアシステムの作動として記述する方法が模索されている。②またジャーナリズム論の領域では、ルーマンのマスメディアのコミュニケーションの定義にしたがって「ジャーナリスト」の定義を再考する可能性が示唆されていた（Görke & Scholl 2006：651-652）。ここではルーマンに倣ってジャーナリズムの社会的機能からジャーナリズムを定義すると、これまでジャーナリズム実践と見なされていなかった対象を包含できるようになることに注目が集まっていた。③日本でも2000年代以降「情報社会論」と呼ばれる領域においてルーマンの枠組みに従ってメディアを社会システムとして論じる議論が展開された（西垣 2004）。これらの議論ではルーマンの議論を下敷きに「情報」という概念を軸とした新たな社会理論の構築が図られていた。以上の先行研究ではさまざまな議論がなされてきたが、概観するとマスメディアという対象を「社会システム」として記述するルーマンの理論的枠組みの抽象性に期待が集まってきたといつてよいだろう。つまりマスメディアをめぐるさまざまな現象の具体的な記述にとらわれるのではなく、それらの諸現象を社会システムという抽象的図式の中に位置づけることで、何らかの認識利得を得ることが期待されてきたのである。

他方でルーマンの理論は、マスメディアをめぐる現象を「システム」として極度に抽象化したことで、経験的なメディア研究において問題とされていることを捨象しているという批判を受けてきた。①例えばルーマンのマスメディア理論を日本に導入した林香里は、彼の議論がジャーナリズムの実践的課題を捨象ないし追認するものであると批判している（林 2002：117-118）。事実、ルーマンはジャーナリストの実践上の課題にほとんど言及せず⁽¹⁾に理論を記述しており、「保守理論」という批判的な目線に向けられるのも頷ける⁽²⁾。また林は、ルーマンが「マスメディア」と「ジャーナリズム」という語を弁別しなかったのはルーマン理論の「根本的矛盾」であり「欠陥」であると主張している（林 2002：118-119）。林の言う「ジャーナリズム」をルーマン理論が記述できるかどうかは検証の余地があるが、少なくともルーマンがジャーナリズムについて主題的に論及しなかったことは確かである。②またドイツのメディア理論家アレクサンダー・ゲルケは、ルーマンのマスメディア理論が報道と政治システムの記述に偏っていると批判している（Görke 2003：121-123）。これをふまえてゲルケは、報道と政治システムの関係だけではなく、広告や娯楽との関係も射程に入れた「公共圏システム」理論の構築を訴えている。以上のような批判をまとめると、ルーマンはメディア研究やジャーナリズム研究の問題には周縁的な関心しか向けておらず、それゆえ彼の理論の記述能力には限界があるという評価が下されていると言える。

以上のような先行研究を踏まえ、本稿ではルーマンが引用しているメディア研究からルーマンのテキストを再解釈することで、彼のマスメディア理論の意義を再検証する。ルーマンは自身のマスメディア理論を構築するにあたって、さまざまなメディア研究やジャーナリズム研究を引用している。そのため、ルーマン自身がどのようなメディア研究やジャーナリズム研究の問題を引き継ぎ解決しようとしているのかを分析することができる。だが上記の先行研究は、ルーマン自身がメディア研究やジャーナリズム研究におけるどのような問題を解決しようとしていたのかにほとんど着目してこなかった⁽³⁾。他方マスメディア理論以外のルーマン学説史研究の中では、ルーマンが議論を編んだ当時のドイツの学説状況からルーマンの議論を再解釈するという試みが盛んになっている（城 2001；小山 2015）。本稿の視座はこのような動向をマスメディア理論の再解釈に取り入れるものである。

ルーマンはさまざまなメディア・ジャーナリズム研究のテキストに言及しているのだが、本稿では1990年代頃のドイツで流行した「ラディカル構成主義」と呼

ばれるメディア論に注目する。1990年代のドイツでは、構成主義認識論の立場からマスメディアについて論じる「ラディカル構成主義」と呼ばれるメディア理論が流行しており、当時ルーマンのマスメディア理論もこのラディカル構成主義を踏まえたメディア論として理解される流れがあった（Scholl & Weischenberg 1998 : 47-51）。しかしルーマン自身は、マスメディア理論の要綱的著作として知られている1996年の『マスメディアのリアリティ 第2版』や、その元となった1994年の論文「マスメディア理論としてのラディカル構成主義？——誤解を招く議論へのコメント」においてこのラディカル構成主義メディア論に対する批判を繰り返している。これを踏まえ本稿では、ルーマンのマスメディア理論とラディカル構成主義メディア論の関係と差異に着目し、ルーマンのマスメディア理論の射程を再検討する。

以上を踏まえ本稿では、ラディカル構成主義メディア論とルーマンのマスメディア理論の関係に注目しながら、ルーマンのマスメディア理論の意義を再解釈する。本稿の構成は次のとおりである。まず、ルーマンが言及しているラディカル構成主義メディア論とそこで共有されている問題意識について分析（2節）、ルーマンがそれらの問題意識に対してどのように回答していたのか分析する（3節）。それらの議論を踏まえ、ルーマンのマスメディア理論がメディア研究においてどのような意義を持っているのかを考察し、メディア研究における社会理論研究の意義と可能性について展望したい（4節）。

2. ラディカル構成主義メディア論とその課題

本節では、ルーマンが言及していた1990年代ラディカル構成主義メディア論においてどのような問題が共有されていたのかを分析する。

2-1 ラディカル構成主義メディア論

そもそも「ラディカル構成主義」とは何なのだろうか。ラディカル構成主義とは1970年代半ばにアメリカの哲学者エルンスト・フォン・グレーザースフェルドによって提唱された認識論である。グレーザースフェルドは、哲学、数学、言語学、心理学などのさまざまな分野を渡り歩いた人物で、人間の認識と知識に関する学際的な問題関心を持っていた。グレーザースフェルドの言うラディカル構成主義は次の2つのテーゼに要約することができる（Glaserfeld 1995=2010 : 124）。

第1に、あらゆる知識は認識主体によって構成されたものである。第2に、われわれが（経験的に）世界と呼んでいるものは、認識主体が環境に適合する過程で自己の認識を組織化したものであり、認識主体から離れたところに客観的世界は存在しえない。つまりグレーザースフェルドのラディカル構成主義とは、われわれが知っていることやそこにあると思っているもののすべてが、われわれ認識主体の認識という働きによって作りあげられたものであると主張する認識理論なのである。

だが「ラディカル構成主義」という言葉はグレーザースフェルドの手を離れ、閉鎖システム理論の思想的潮流を示す標語として用いられるようになる。20世紀半ばに、生物体、神経系、機械、認識といったものを閉鎖システムとして記述する理論が同時多発的に成立したのだが、これらの議論は「ラディカル構成主義」という語を掲げた。例えばハインツ・フォン・フェルスターのサイバネティクス理論、ウンベルト・マトゥラーナとフランシスコ・ヴァレラのオートポイエーシス理論などがそれである。この流れを受けルーマンもラディカル構成主義を批判的に継承した閉鎖システム理論を構築していた（Luhmann 1988=1996：225-229）。1990年代にルーマンのマスメディア理論が「ラディカル構成主義」に位置付けられていたことや、ルーマンが1994年の論文においてラディカル構成主義の批判からスタートしていることには、このような背景があったと言える。

このような動きの中で1990年前後のドイツ語圏において、ラディカル構成主義的認識論をメディア研究やジャーナリズム研究の領域に応用する研究者が現れた。1970年代にラディカル構成主義を導入していた文学理論家ジークフリート・シュミットの議論を皮切りに、ウルリヒ・ザクサー、ヘルマン・ボヴェンター、ジークフリート・ヴァイシェンベルグ、ラルフ・ゲッデなど、多数のドイツ語圏の研究者がメディア論やジャーナリズム論とラディカル構成主義的認識論の接続を試みたのである。ルーマンが自身のマスメディア理論を構築するにあたって射程に入れていたのは、このような構成主義的認識論を継承したメディア論であったのである。

2-2 認識論からの出発と実践と理論の反省

ではラディカル構成主義メディア論は具体的にどのような議論をしていたのだろうか。ここではラディカル構成主義メディア論の展開を包括的に記述するのではなく、ルーマンがテキストの中で直接言及していたウルリヒ・ザクサーの「構

成主義批判のテーゼ」(1992)とヘルマン・ボヴェンターの「プラトンの洞窟の中のジャーナリスト」(1992)という論文に着目する⁽⁴⁾。この2つの論文はドイツ公共放送連盟(ARD)が1990年から1991年にかけて放送したラジオ講座「メディアとコミュニケーション」の内容が元になっている。この番組では、ザクサーやボヴェンターらが出演しラディカル構成主義メディア論の議論を基にメディアについて問題提起を行っていた(Boventer 1992: 159-160)。では彼らはこの論文の中でどのような議論を展開していたのか。以下で3つに分けて説明しよう。

第1に、ボヴェンターとザクサーはラディカル構成主義的認識論から出発することで、「客観性」や「中立性」や「真実」といったジャーナリストの職業倫理的な価値観を批判している(Saxer 1992; Boventer 1992: 157)。先にグレーザー・フェルドの議論で確認したように、ラディカル構成主義的認識論とは、あらゆる認識や知識が認識主体によって構成されたものであると捉え、客観的世界の存在を否定するという考え方である。この考えを前提すると、ジャーナリズムの実践や教育の現場においていわれる職業倫理的な価値観——例えば報道は客観的であるべきだとか、ジャーナリストは政治的に中立であるべきだとか、ジャーナリストは真実を報道すべきだという考え——が無効になる。つまりラディカル構成主義メディア論を前提すると、ジャーナリストの報道する内容は客観的な真実などではなく主観的な虚構となるのである。

第2に、ボヴェンターとザクサーはこういった認識論的な問題設定によって、ジャーナリストの実践的活動に反省を迫っている。例えばボヴェンターはラディカル構成主義理論によってジャーナリズムの職業文化の「記述能力の狭さを知り、穏当に捉え直す」ことができると述べている(Boventer 1992: 165)。またザクサーも「メディア批判の文脈では、ラディカル構成主義は、メディアのリアリティを脱神学的に捉え、ジャーナリズムが行うことと生み出すものの性質を鋭敏に察知することに寄与できるだろう」と述べる(Saxer 1992: 181)。つまりジャーナリストたちが自らの実践を正当化する上で用いている「客観性」や「中立性」といった基準が無効になるとすると、ジャーナリストがどのような基準によってその実践を可能にしているのかということ捉えなおさなければならないということになる。したがってラディカル構成主義は、ジャーナリストの活動の反省を促すという点でジャーナリストの実践にも貢献すると主張されているのである。

ここで注目しておきたいのはボヴェンターとザクサーがこういったラディカル構成主義の議論を「作られた現実(die erfundene Wirklichkeit)」という語で表し

ている点である (Boventer 1992 : 157 ; Saxer 1992 : 178)。これはポール・ワツラウィックが1981年に編集して出版し、グレーザースフェルド曰く「他のどの本よりも構成主義的着想を広めるのに多くの貢献を果たした」(Glaserfeld 1995 = 2010 : 54) 論文集『作られた現実 (Die Erfundene Wirklichkeit)』のタイトルから取られたものだと考えられる。ボヴェンターとザクサーは、ラディカル構成主義メディア論がマスメディアの報道する「現実」をジャーナリストによって「作られた」ものであると捉えていることを、この語によって表現しているのである。

第3に、ボヴェンターとザクサーはラディカル構成主義の問題を指摘しながら、メディア理論自体にも反省を促している。ボヴェンターとザクサーは、ラディカル構成主義的認識論の立場からジャーナリズムを批判することは、ジャーナリズムの担う政治的機能を破壊しうるものであると論じている (Boventer 1992 : 164 ; Saxer 1992 : 182)。一般的にいて、ジャーナリズムが客観的で中立的な報道を遂行することは市民が政治家の動向を観察するために必要であり、その意味でジャーナリズムは民主主義において重要な役割を果たしていると考えられてきた。しかしニュースで報道されていることがジャーナリストという認識主体が主観的に構成したものであり、彼らの客観性や真実性という公準も彼ら自身が構築した虚構的なものにすぎないとするならば、このような民主主義社会の前提条件であるジャーナリズムを否定することになる。ボヴェンターやザクサーはそういったシニシズムに陥るのではなく、メディア理論自体を反省的に再構築することで、民主主義社会においてメディアが持つ機能を救い出さなければならないとしているのである。

このメディア理論の反省というプロジェクトに際して、ザクサーはルーマンのシステム理論の意義に着目していた。ザクサーはこの論文の中でラディカル構成主義メディア論が認識論にとどまっている限り、マスコミュニケーションという現象を十全に扱うことができないと主張している (Saxer 1992 : 179-180)。新聞や放送などを介して展開されるコミュニケーションは、送り手と受け手という複数の認識主体間で成立するものである。だがラディカル構成主義メディア論は、そういった複数主体間で起きる出来事を個々人の知覚や認識へと還元しているという点において限界があるのだ。ここでザクサーはルーマンの社会システム理論的な構成主義のアプローチに着目する (Saxer 1992 : 178)。ルーマンは認識主体の閉鎖的な現実構成だけではなく、社会システムという統一体による閉鎖的な現実構成を論じている。ザクサーはルーマンの理論によってラディカル構成主義メデ

ディア論を再構築することができるのではないかと主張していた。ボヴェンターも論文の末尾でザクサーのこのような主張を紹介しており (Boventer 1992 : 165), 彼らがルーマンの社会システム理論に問題解決の期待を寄せていたことがわかる。

2-3 構成主義のアクチュアリティ

ここまで述べたボヴェンターとザクサーのラディカル構成主義メディア論をまとめよう。①まずザクサーやボヴェンターらは、ラディカル構成主義認識論から出発することで、ジャーナリズムにおける客観性や中立性といったものを批判した。②次にこれを踏まえてザクサーやボヴェンターらは、ジャーナリズムの実践に対して反省を促した。しかしそのような理論的観点からジャーナリズムを批判することは、ジャーナリズムの活動を阻害することになるし、民主主義の成立条件をも揺るがすことになる。③それゆえボヴェンターとザクサーは、マスメディア理論にも反省を促し、理論と実践の乖離に際してその架橋の必要性を訴えたのである。

しかしなぜ、1990年代にこのような構成主義的なメディア論が流行したのだろうか。この背景には湾岸戦争でのジャーナリズム批判がある。よく知られている通り、1991年の湾岸戦争では多国籍軍の情報統制や検閲のあり方が問題となり、これに抵抗できなかったジャーナリストたちに対する批判が相次いだ。ラディカル構成主義に言及していたジャーナリズム論者たちはこの問題に積極的に言及していた。例えばザクサーは湾岸戦争の報道を例に挙げ、戦争報道に際してマスメディアが戦争の現実を歪めたとしている (Saxer 1992 : 178)。またフリージャーナリストのラルフ・ゲッデは、ラディカル構成主義理論を用いて湾岸戦争における戦争報道の分析を行っている (Gödde 1992 : 276-278)。ゲッデ曰く、報道は起こった出来事や発表されたものごとを報道するというルーティーンに支配されており、その結果多国籍軍の「大本営発表」をそのまま報道し続けることになった。ゲッデはこのような状況を踏まえ、マスメディアが報道している現実を、実際に起きたことでもなければ皆の中で合意されたことでもなく、ほかならぬマスメディア自身が構築したリアリティであると捉えなおさなければならないと批判している。そしてルーマンもゲッデの議論を引用しつつ湾岸戦争に言及している (Luhmann 1996=2005 : 18)。もちろんマスメディアによって「作られた現実」を疑うという構成主義的な問い立て自体は、時代や場所を問わずに繰り返されている。古くはウォルター・リップマンの「疑似環境論」、ごく最近のものでは「ボ

スト真実」と呼ばれる言説がそうである。しかし90年代のドイツのメディア論において殊更に認識論的・批判的な問題がフォーカスされ、それがラジオ番組になるまで大きな関心を引き起こし、そしてルーマンがその議論を下敷きにマスメディア理論を構築したことには、このような社会的背景もあったのである。

3. ルーマンマスメディア理論の応答とジャーナリズム実践との距離

前節の議論で、1990年代のドイツにおいて展開したラディカル構成主義メディア論が、①認識論からの出発、②ジャーナリズム実践の反省、③メディア理論の反省という3つの問題を提起していたことが明らかになった。ルーマンのマスメディア理論の背景にはこのような問題意識があったと言える。では、ルーマンはこれらの問題に対してどのように応答していたのだろうか。ここではルーマンの1994年の論文「マスメディア理論としてのラディカル構成主義？——誤解を招く議論へのコメント」と、1996年の『マスメディアのリアリティ 第2版』の記述を踏まえ、このことを分析しよう。⁽⁵⁾

3-1 反認識論としてのルーマンマスメディア理論

第1に、ルーマンはラディカル構成主義メディア論が認識論から出発していたことを批判し、システム論から出発する構成主義に切り替えるよう訴える。先にも述べたようにラディカル構成主義は、主観／客観という伝統的な区別を前提し、主観の側に特権性を与え客観世界の存在を否認するものであった。これに対し1994年の論文でルーマンは主観／客観の区別からスタートすることを拒否し、システム／環境の区別からスタートするべきであると述べていた (Luhmann 1994: 7)⁽⁶⁾。言い換えるとルーマンは、知覚や認識によって成立する認識システムに加えて、認識主体間で起きるコミュニケーションによって成立する社会システムを射程に入れた構成主義理論を掲げたのである。したがってルーマンのいう「マスメディアのリアリティ」とは、ジャーナリストという認識主体によって構成されるものではない。そうではなく、ジャーナリストや新聞社や放送局の人々や読者や視聴者といった複数の認識主体の間で、それらの認識主体から自律して成立するコミュニケーションにおいて構成されるものなのである。ところでルーマンは1994年の論文に「誤解を招く議論へのコメント」というサブタイトルをつけているのだが、この「誤解を招く議論」のところに脚注が付されており、ここで本稿の2節

で扱ったボヴェンターとザクサーの論文を引用している。ルーマンがここで「誤解を招く」と言っているのは、伝統的な認識論から出発するラディカル構成主義とシステム論から出発するルーマンの構成主義（作動的構成主義）の区別を、ザクサーやボヴェンターらが見逃していることを指していると考えられる。

しかしこの認識論からの出発を棄却し社会システム理論から出発するというアイデア自体は、ザクサーが1992年の論文で先に提示していたものである。では、ザクサーやボヴェンターたちの議論と、ルーマンの議論はどこが異なるのか。このことが第2の論点と第3の論点とに関わることになる。

3-2 反規範論としてのルーマンマスメディア理論

第2に、ザクサーやボヴェンターらはラディカル構成主義理論の前提からジャーナリズムへの反省を促していたが、ルーマンはこのような規範的な議論を批判していた。まずルーマンは『マスメディアのリアリティ』の冒頭で、ラディカル構成主義が提起していたような、マスメディアがどうやって「現実」を歪めているのかという問題設定を批判している（Luhmann 1996=2005:16）。ルーマンはジャーナリズム論者が「マスメディアが現実を歪めている」と批判することは、ジャーナリズム論者が構成した現実とマスメディアが構成した現実を比較し、前者の方が優れていると主張しているに過ぎないと喝破している。ただしこの箇所ではルーマンはラディカル構成主義の議論に直接的に言及しているわけではない。しかしこの箇所を踏まえると、ラディカル構成主義メディア論のように「作られた現実」という理論的観点からジャーナリズムの反省を促すような戦略に対し、ルーマンが批判的な態度をとっていたことがわかる。

さらにルーマンは『マスメディアのリアリティ』の中で、先述したラルフ・ゲッデのテキストを引用し、別の角度からそのようなラディカル構成主義メディア論の規範論的性格に対する批判をしている（Luhmann 1996=2005:18）。ルーマンは湾岸戦争における多国籍軍の情報統制がマスメディアのルーティーンに適合的なものであり、それゆえに軍の検閲が効果的に作用したというゲッデの分析を肯定的に受け取っている。しかしルーマンはゲッデの批判的な論調については批判的に言及している。ルーマン曰く、湾岸戦争の「ピンポイント爆撃」の映像をマスメディアによって構築されたイメージであると批判する人は、「戦争では大量の犠牲者が出ている」というイメージを前提して批判しているのだが、後者のイメージもまたマスメディアによってもたらされた情報に基づくものである。言い

換えれば、マスメディアが媒介するリアリティが虚偽であるという批判もまた、マスメディアが媒介した情報に基づくものなのである。

そして理論的観点からジャーナリズム実践を批判するという理論研究の方向性を批判したルーマンは、マスメディアを介して起きる日常的なコミュニケーションにおいてどのような情報選択の基準が働いているのかということに着目していた。ルーマンは『マスメディアのリアリティ』の5章「ニュースとルポルタージュ」や7章「広告」や8章「娯楽」で、われわれが日常的にいかなる情報を「ニュース」や「広告」や「娯楽」として理解しているのかということに執拗に着目していた。例えば5章でルーマンはニュースパリュウの議論に注目し、ニュースの送り手がどのような情報をニュースとして選定しているのか、そして受け手がニュースを通してどのような情報を知ることができるかと期待しているのかということを書述している（Luhmann 1996=2005：44-66）。つまりルーマンは、送り手がどのような情報を「ニュース」や「広告」や「娯楽」として提示しているのか、また受け手がどのような情報を「ニュース」や「広告」や「娯楽」として理解しているのかということから出発したのである。言い換えればルーマンは、ジャーナリストの実践や新聞を読む人々の実践を批判するために理論を構築したのではなく、彼らの実践における常識的知識から出発しそれを抽象化することで理論を構築したのである。

つまりルーマンは、理論的観点からジャーナリズム実践に対して批判を与える規範的な議論に待ったをかけ、ジャーナリズムを含むさまざまなマスメディアを介したコミュニケーションの実践から出発する理論構築を進めたのである。換言すればルーマンは規範的な議論を回避し、記述的な議論に定位しようとしたのだ。⁽⁷⁾ 実はこのような禁欲的な態度はルーマンの社会学研究において一貫して保たれているものである。例えばルーマンの教授就任演説である1970年の「社会学的啓蒙」では、実践者関与的な理論構築を目指す自身の学的態度を「社会学的啓蒙」と呼んでいた（Luhmann 1970=1983：76-78；三谷 2004：9）。また晩年に自身の社会学理論の集大成としてまとめた1998年の『社会の社会』の冒頭でも、啓蒙思想や批判理論を批判しながら、社会学が成すべきなのは「教えを垂れるのではなく学ぶことである」と述べている（Luhmann 1998=2009：8-9）。つまりルーマンはマスメディア理論の記述においてもこのような方針を引き継いでいるのだ。

3-3 社会システム理論から見るマスメディアの機能

第3に、ザクサーやボヴェンターらはラディカル構成主義理論がジャーナリズムの社会的機能を批判するものであるとして批判していたが、ルーマンは自身のシステム論的構成主義の立場からマスメディアの社会的機能を捉え直そうとしていた。では、ルーマンはマスメディアにどのような社会的機能を見出したのだろうか。

まず、ルーマンはマスメディアを社会の機能システムとして捉え、その社会的機能を社会の諸機能システムとの関係から捉えていた。ルーマンは近代社会を、複数の機能システム（政治システム、経済システム、法システム、学問システム、芸術システム、宗教システム、教育システムなど）に水平的に分化した「機能分化社会」であると捉えていた（長岡 2006：10-13）。そして各機能システムは、どの他のシステムにも優越するものではなく、それぞれ別の仕方ですべての社会に対する機能を担っているとされている。ルーマンはマスメディアをこのような社会の機能システムの1つとして捉えた。したがってルーマンにとってのマスメディアの社会的機能とは、ボヴェンターやザクサーが言っていたように民主主義体制＝政治との関係のみから設定されたものではなく、政治や経済や法や学問や芸術や宗教や教育といったすべての諸機能システムとの関係において設定されるものとなる。

次に、ルーマンはマスメディアの機能を、日々新しい情報を報道し続けることによって、社会システムの維持と変動の可能性を同時に実現することであると捉えている。ルーマン曰く、マスメディアシステムは報道や広告や娯楽と呼ばれる特殊な方法で、あらゆるコミュニケーションの前提となる新たな情報を生産し続けるという固有の働きを担っている（Luhmann 1996=2005：143）。マスメディアシステムはこの働きによって、社会システムとその諸機能システムにおいて、①ルーティーン的にコミュニケーションを続ける構造（再生産の構造）と、②ルーティーンでは対応できないような情報に対応するための構造（情報の構造）を実現させている（Luhmann 1996=2005：144）。つまりマスメディアの機能とは、政治や経済や法や学問や芸術や宗教や教育に対し、維持するために必要なものと変動させるために必要なものの双方を同時に可能にすることなのである。

このルーマンの捉え方に2つ注意すべき点がある。①まずルーマンは、マスメディアシステムが他の機能システムに優越する権能を持っていると言っているわけではない。マスメディアの報道内容によってどのような政治的現象や経済的現象が起きるのかは、マスメディアを前提した政治システムや経済システムによ

て制御されることであり、マスメディアシステムが直接決定できることではない。マスメディアシステムは新しい情報を発信し続けるということしかできず、維持や変動の可能性を媒介しているにすぎないのである。②もう1つは、ルーマンがマスメディアの情報伝達が他の機能システムの「刺激」となると捉えている点である。政治家のスキャンダルや取り付け騒ぎや虚偽報道などを思い浮かべるとわかるが、マスメディアは時として政治や経済や学問のルーティーン通りのコミュニケーションにとってリスクとなるような情報を伝達することがある。言い換えると、マスメディアはそのようなリスクを含んだ情報を発信し続けることによって「現代社会が既存の諸構造と極端に強すぎる絆で結びつくことを妨げる」のである(Luhmann 1996=2005:145)。つまり、ルーマンにとってマスメディアの機能とは、社会システムを維持する前提となるだけでなく、社会システムに刺激や擾乱をもたらしその変動のきっかけを与えることなのである。

まとめるとルーマンは、認識論や規範論を回避し社会システム理論から出発することで、「機能分化社会」という秩序表象からマスメディアの社会的機能を捉え直したのである。換言すればルーマンは、認識論や規範論を回避し、社会システムの多元性・多様性という前提から出発することで、マスメディアの機能をその他の機能システムの関係から捉え直したのだ。

4. おわりに

本稿ではルーマンが言及していた1990年代のドイツのラディカル構成主義メディア論を踏まえて、ルーマンのマスメディア理論を再解釈した。ラディカル構成主義メディア論は、①構成主義的認識論から出発することで「客観性」や「中立性」と言った価値基準を批判することで、②ジャーナリズム実践に対する反省的な議論を促し、③ジャーナリズムの民主主義社会に対する意義という点からマスメディア理論の側にも反省を促していた。これに対しルーマンは、①認識論を批判しシステム論から出発することで、②規範的なメディア論を批判し、③社会システム理論の枠組みでマスメディアの社会的機能を捉え直そうとしていた。その結果ルーマンは、マスメディアの社会的機能を機能分化社会という立脚点から捉え直したのである。

ではその機能分化社会という立脚点からマスメディアを捉えるというルーマン理論の示唆を踏まえると、社会理論的メディア研究にどのような方向性を見いだ

すことができるだろうか。まずルーマンの議論に沿って社会現象を捉えることで、マスメディアや政治、経済、法、学術、芸術、宗教といったさまざまな領域を「社会システムの作動」として抽象化することができる。そのような抽象化を踏まえることで、機能的に分化した社会システムとの関係という参照問題からマスメディアとそれらの別の領域と比較することが可能となる。例えば、「情報／非情報」の観察を継続することで機能分化を維持するというマスメディアシステムの社会的機能は、「合法／不法」を観察し続ける法システムや、「真理／非真」を観察し続ける学術システムといった他の機能システムとの偶発的な関係の中に位置付けられるのである。つまりルーマンは、メディアを介して起きるさまざまな社会的実践をシステムの作動として抽象化し、その他のさまざまな社会的実践と比較し捉え直すための比較図式として社会システム理論を提示しているのだ。ルーマンが社会理論的メディア研究に示唆しているのは、そのような比較図式としての理論の構築なのである。

このことを敷衍するとルーマンのいう「理論」とは、政治理論的なメディア論や批判理論的なメディア論とは異なる目的を持つものであることがわかる。①まずある種の政治理論的メディア論は、民主主義社会の秩序とメディアの関係の論究を目的としてきた。このような議論は、ルーマンの議論の中では政治システムとマスメディアシステムという限定されたシステム間の問題として捉え直される。ルーマンの議論にしたがって言えば、社会理論的メディア研究は、政治、経済、法、学術、芸術、宗教といったより広い領域とマスメディアの関係を射程に入れなければならないのである。⁽⁸⁾②また批判理論的メディア論は、さまざまなメディアが跳梁跋扈する現代のメディア環境に対して「批判的で適切な分析」を行うための理論の構築を目的としている（毛利 2017: 43）。しかしここまで繰り返してきたようにルーマンのいう「理論」とは、現実を比較しながら捉え直すための図式であり、現実を批判するための聖典ではない。もちろん政治理論や批判理論が誤っているとか、ルーマンの試みの方が優れているとか言いたいわけではない。ここで強調しておきたいのはルーマンのいう「理論」とは、政治理論や批判理論のいう「理論」とは異なる方向性を社会理論的メディア研究に示唆しているということである。

以上の考察結果と冒頭でまとめた先行研究を比較しておこう。①まずルーマンの応用可能性を訴えていた先行研究（西垣 2004；Görke & Scholl 2006；Marcinkowski 2014；Meyen et al. 2014）は、ルーマンが機能分化社会全体との関連か

らマスメディアを捉え直そうとしたことを見逃している。それらの先行研究はルーマン理論の意義を、その抽象性の高さそれ自体や、特定の機能システムとの関係から捉えていた。もちろんそれらの意義自体は否定できないが、ルーマン理論の最大の意義は機能分化社会という立脚点からマスメディアを捉えている点にあるというべきであろう。②また抽象性の高さゆえにルーマン理論とメディア研究の乖離を示唆していた先行研究（林 2002, 2003；Görke 2003：111-113）は、ルーマンがその抽象化によって何を可能にしようとしていたのかを見逃していた。確かにルーマンは、ジャーナリズムの実践的問題や、広告や娯楽の現実のあり方を捨象したのだが、それによって異なる理論的目的を提示しようとしていたのである。

ここまでの議論を踏まえ今後の課題を述べる。本稿ではルーマン理論の示唆を踏まえ、メディア研究における社会理論研究の可能性を提示した。そのような理論研究の推進にあたって必ずしもルーマン理論から出発する必要はないのだが、どの理論家の議論を踏まえるにしても各々の理論の問題を検討し批判的に再構築していく必要はある。ここではルーマンのマスメディア理論の理論的課題を指摘しておこう。①まずルーマンは、マスメディアを介して起きる諸実践の記述から出発しそれを抽象化することで理論構築を進めている。しかしゲルケが先行研究で指摘しているように、ニュースという限定的な対象に力点を置いている可能性がある（Görke 2003：121-123）。これを踏まえゲルケが試みているように、ルーマンのマスメディア理論を経験研究の成果から検証・再構築する必要がある。②特に新聞やラジオやテレビからインターネットへと情報発信形態が多様化している現代において、ルーマンのマスメディアシステム理論の限界を検討することは重要な課題となる。ルーマン自身は、コンピューターを介したコミュニケーションをマスメディアシステムの作動として記述することには消極的であった（Luhmann & Laurin 1997：20）。しかしインターネットによるニュース発信が一般化した現在において、ルーマンが想定していたものと異なる「情報」の選択構造が成立しているならば、その点を踏まえてマスメディアシステムのプログラムの議論を再検討しなければならない。③さらに本稿ではルーマンの理論の利点（マスメディアシステムとその他の機能システムとの関係を射程に入れることができるという点）であると述べた。しかしそうだとすれば、その利点を享受するためにはその他の機能システム理論の再検討も必要となる。

注

- (1) これらの議論では、さまざまなメディアの情報発信において用いられている情報選択の原理を「メディアロジック (media logic)」と呼び、この「メディアロジック」が政治や経済や法や宗教や科学やスポーツといった実践にどのような影響を与えているのかということをも「メディアタイゼーション (mediatization)」と呼んで論じている。メディアタイゼーション理論の動向についてはフランク・マルチン・コフスキーおよびアンドレアス・ヘップの記述を参照 (Marcinkowski 2014; Hepp 2011=2013)。
- (2) 他方でこういった理解は、戦後の反フランクフルト学派の旗手であり、アールト・ゲーレンやヘルムート・シェルスキーらの系譜を継ぐ「保守的」な社会理論家であるというルーマン自身の人物像に起源する理解であるようにも見える。この系譜については城達也の記述 (城 2001: 251-281) を参照のこと。
- (3) ルーマンの理論と当時のドイツのメディア研究の関係に着目した例外的な先行研究として林香里の議論を挙げることができる。林はルーマンの議論の背景に「コミュニケーション学」や「メディア学」というドイツにおける新興の学的領域の対象の画定という問題があったとした (林 2003: 51)。
- (4) ここではドイツにおけるラディカル構成主義メディア論の展開過程について概括的に論じなかった。先行研究では、ラディカル構成主義の代表としてジークフリード・シュミットの議論をまとめたもの (Hepp 2011=2013: 17-23) や、そのシュミット自身が自身の理論展開について述べたもの (Schmidt 2010) はあるが、概括的に論じた学説史研究は無い。これは以降の学説史研究において展開すべき課題である。
- (5) ルーマンのマスメディア理論を網羅的に理解するためには、先行研究 (林 2002: 77-121; 大黒 2006: 287-429; Berghaus 2011: 189-259) が試みているように、「コード」, 「プログラム」, 「オートポイエーシス」など彼の社会システム理論のターミノロジーを踏まえて解釈する必要がある。しかし本稿ではその作業を避け、ラディカル構成主義メディア論の提起した問題からの再解釈に定位した。
- (6) ルーマンはシステム/環境から出発する自身の構成主義理論を、ラディカル構成主義から区別して「作動的構成主義 (Operativer Konstruktivismus)」と呼んでいた。グレーザー・フェルドのラディカル構成主義とルーマンの作動的構成主義の差異に関してはルーマン自身の記述 (Luhmann 1988=1996: 225-229) および長岡克行 (2006: 586-587) の記述を参照。
- (7) ルーマンがこのような規範的なジャーナリズム論に対して批判的な態度をとっているということ自体は先行研究でも指摘されている (Görke & Scholl 2006: 652; Bechmann & Stehr 2011: 142-143)。本稿ではルーマンが具体的にどのような議論を批判対象にしていたのかということをも明らかにした点でこれらの先行研究を更新している。
- (8) このようなルーマン理論の試みの新奇性を十全に評価するためには、他の類似の試みとの比較が必要になる。例えばニック・クドリャーは社会的実践の意味構築的な側面に着目しながら、「政治的なもの」の秩序化に留まらない、メディア実践を

介して起きる「社会的なもの」の秩序化を論じようとしていた（山腰 2017：57-59）。例えばルーマンのいう機能分化社会という社会秩序観とクドリーのいう社会秩序観の差異に着目しつつ比較していくことで、ルーマン理論の利点・欠点を浮き彫りにしていくことができるだろう。

引用・参考文献

- Bechmann, Gotthard & Stehr, Nico (2011) "Niklas Luhmann's theory of the mass media", *Society*, 48(2), 142-147.
- Berghaus, Margot (2011) *Luhmann leicht gemacht*, 3. Aufl., Böhlau.
- Boventer, Hermann (1992) "Der Journalist in Platons Höhle: Zur Kritik des Konstruktivismus", *Communicatio Socialis*, 25(2), 157-167.
- 大黒岳彦 (2006) 『メディアの〈哲学〉——ルーマン社会システム理論の射程と限界』 NTT 出版
- Glaserfeld, Ernst v. (1995=2010) *Radical Constructivism: A Way of Knowledge and Learning*, Falmer. (橋本渉訳『ラディカル構成主義』NTT 出版)
- Gödde, Ralf (1992) "Radikaler Konstruktivismus und Journalismus: Die Berichterstattung über den Golfkrieg - Das Scheitern eines Wirklichkeitsmodells", Rusch, Gebhard & Schmidt, Siegfried J. (Hgg.): *Konstruktivismus: Geschichte und Anwendung*. Suhrkamp, 269-288.
- Görke, Alexander (2003) "Das System der Massenmedien, Öffentlich Meinung und Öffentlichkeit", Kai-Uwe Hellman et al. (Hgg.) *Das System der Politik*, Westdeutscher Verlag, 121-135.
- Görke, Alexander & Scholl, Armin (2006) "Niklas Luhmann's Theory of Social Systems and Journalism Research", *Journalism Studies*, 7(4), 643-655.
- 林香里 (2002) 『マスメディアの周縁, ジャーナリズムの核心』新曜社
——(2003) 「ルーマン理論とマスメディア研究の接点——ドイツの『コミュニケーション学』の動向」『思想』2003年7月号 岩波書店 48-63
- Hepp, Andreas (2011=2013) *Die Kulturmediatisierter Welten*, Springer. (Tribe, Keith trans. Culture of Mediatization, Polity.)
- 城達也 (2001) 『自由と意味——戦後ドイツにおける社会秩序観の変容』世界思想社
小山裕 (2015) 『市民的自由主義の復権——シュミットからルーマンへ』勁草書房
- Luhmann, Niklas (1970=1983) "Soziologische Aufklärung", Niklas Luhmann, *Soziologische Aufklärung* 1, Westdeutscher Verlag, 66-91. (土方昭訳「社会学的啓蒙」『ニクラス・ルーマン論文集1 法と社会システム 社会学的啓蒙』新泉社)
——(1988=1996) *Erkenntnis als Konstruktion*, Benteli Verlag. (土方透・松戸行雄訳「構成としての認識」『ルーマン, 学問と自身を語る』新泉社 223-256)
——(1994) "Der 'Radikale Konstruktivismus' als Theorie der Massenmedien?: Bemerkungen zu einer irreführenden Debatte", *Communicatio Socialis*, 27(1), 7-12.
——(1996=2005) *Die Realität der Massenmedien*, Westdeutscher Verlag. (林香里訳『マスメディアのリアリティ』木鐸社)

- (1998=2009) *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag. (馬場靖雄 他訳『社会の社会 1, 2』法政大学出版局)
- Luhmann, Niklas & Laurin, Stephan (1997) "Das Internet ist kein Medium?: Niklas Luhmann über Medien, Journalisten und Wahrheit", *Unicum*, 15(2), 20.
- Marcinkowski, Frank (2014) "Mediatization of Politics: Reflections On the State of the Concept", *Javnost-The Public*, 21(2), 5-22.
- Meyen, Michael, Thieroff, Markus & Steffi Strenger (2014) "Mass Media Logic and The Mediatization of Politics", *Journalism Studies*, 15(3), 271-288.
- 三谷武司 (2004) 「ルーマン型システム理論の妥当条件——実践的動機の解明と理論の評価に向けて」『ソシオロゴス』28 1-14
- 毛利嘉孝 (2017) 「ポストメディア時代の批判的メディア理論研究へ向けて」『マス・コミュニケーション研究』90 29-45
- 長岡克之 (2006) 『ルーマン／社会の理論の革命』勁草書房
- 西垣通 (2004) 『基礎情報学——生命から社会へ』NTT 出版
- Saxer, Ulrich (1992) "Thesen zure Kritik des Konstruktivism", *Communicatio Socialis*, 25(4), 178-183.
- Schmidt, Siegfried J. (2010) "Literary Studies from Hermeneutics to Media Culture Studies", CLCWEB: Comparative Literature and Culture, 12(1). (retrieved July 15 2017 URL: <http://docs.lib.purdue.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1569&context=clcweb>)
- Scholl, Armin & Weischenberg, Siegfried (1998) *Journalismus in der Gesellschaft*, Westdeutscher Verlag.
- 山腰修三 (2017) 「メディア・コミュニケーション研究と政治・社会理論——ヘゲモニー概念の展開とラディカル・デモクラシー」『マス・コミュニケーション研究』90 47-63